



TITLE:

総合討論 (2)

AUTHOR(S):

CITATION:

総合討論 (2). 重点領域研究総合的地域研究成果報告書シリーズ : 総合的地域研究の手法確立 : 世界と地域の共存のパラダイムを求めて 1996, 18: 79-87

ISSUE DATE:

1996-05-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/187563>

RIGHT:

総合討論（２）

斎藤 「近代化」とは、常に国家というフレーム抜きには語られることはなかった。逆に言えば、それを外してしまったときに、常に「伝統」しか残っていないのだという認識は間違いだろう。だが、空っぽなのではなく、何かがあると思う。商業的なネットワークや、人の交流圏、通行圏のように様々な形であるはずだ。ただそれが「伝統」であると考えるのは間違いだ。それに近代化による変化を見ないのはおかしいのではないか。そういうところにも「近代化」というモチーフで目を向けてみる必要がある。

その際、そこに残ったものが事象として語られるのであれば、それは極めて新しい伝統として語られるものである。それを「伝統」だと言うことには注意を払わねばならない。国家の枠組みを取ったときに何を見つけられるかは、相手の言い値ではなく、我々が自分で観察して見つけなければならないという考えだ。ただ、そこに出てくるものが、果たして緩やかな東南アジアの広がりで収まるものなのか、もっといびつな東南アジアのあの形に一致しないようなものなのか。それはまだわからないが、それはそれで受け入れざるをえないだろうと考えている。

古田 ベトナム中心主義というのは言い当てられている。より正確に言えば、私の議論はハノイ中心主義になる。ベトナムにとっての東南アジアは、メコンデルタという極めて異

質な生態空間を自らの版図の中に抱え込んだが故に、出てこざるをえなくなった問題であることも指摘のとおりである。

そうなると、かつては中華文明を東南アジアに普及する拠点、20世紀においては社会主義を東南アジアに広げる拠点として自らを位置づけていたハノイが、ただの東南アジアの国でというのでどこまで我慢できるのだろうかということが問題になってくる。小笠原さんのコメントにもあったように、ベトナムは東南アジア地域の一員になることを極めてグローバルに位置づけている。現在の世界ではグローバリゼーションと地域化が、人類史の大きな流れである。この流れに乗ることに、自らの存亡をかけているのであろう。私の述べた地域国家と普遍国家は、必ずしも座標軸の反対に位置づいているものではない。

岩崎 大状況を受容して、小状況の中で自己主張するという結論に対する批判があった。とりわけ大状況を受容することを問題にされていると思うが、例えば欧米主導型の政治経済システムを嫌うのであれば、独立後にミャンマーが鎖国をしたような選択肢もありうるだろう。だが現代のASEANでは考えられない話だ。既に閉じることのマイナスを知っている。外に繋がって社会発展を進めていくには、欧米という大国の枠組みの中でやるしかないということは、ASEAN諸国の政治指導者レベルでは共通の認識としてあるだろ

う。その意味で「大状況は受容」としている。この点についてはこれからも教えて頂きたいと思う。

開発体制の後に何がくるかという問題では、ASEAN諸国の開発体制は利口だと言われた。その場合は「ずるさ」もあるかと思う。開発体制が歴史的使命を終えたにも関わらず、崩壊していない一つの要因でもある。批判をやわらげるために民主化を小出しにしていくという利口さもあるだろう。しかし開発体制の後に、東南アジア諸国のこれから国家統合、国民統合体制の正当性の核になっていくのは、やはり文化や土着的な歴史要素に根ざしたその国固有のものがキーワードになっていくのではないかと思う。

倉沢 今日の議論では、現代の開発体制の副産物としての、東南アジアにおける新しい都市文化の形成の問題が出てこなかった。例えば新中間層の形成という問題がある。これは新しい一つの階級概念で、その消費パターンや行動パターン、価値観において、全く新しいものを身につけた人々が出現している。これも一種の近代化なのかもしれない。これが国境を超えて、開発体制をとっている様々な国に共通の文化を作っているような現象があるのではないか。

それは確かにアメリカ文化を模倣した部分があり、あるいは日本文化が浸透していった部分もある。もう一つ大きな香港文化の影響もあり、非常にある意味で他律的に見えるが、

決して押しつけられたものではない。中間層と言われる人達が自ら好んで取り込んでいった新しい文化である。脱ナショナリズム的とも言えるような、こういう新しい国の枠を超えた都市文化、新中間層の文化の形成が、新しい現代版の東南アジア世界の形成に一つのインパクトを与えてはいないのだろうか。

一方で、開発体制をとっている国々の支配者達は、それに対する危惧を感じているのだろうか。例えばスハルト体制ではイスラームを中心に据えようとする傾向が強い。イラン革命の影響を受けた原理主義的なイスラームは排除しつつ、全く新しい形のイスラームを提示して、脱ナショナリズム的になっていく都市階層をコントロールしようとするような動きも見られる。最近の東南アジアを見て、そういうことを感じている。

片山裕 岩崎さんへの質問だが、韓国と台湾と東南アジアに、自律した官僚があり、あるいは社会から遮断された行政というものがあるという前提で、1960年代から80年代の開発を論じているのは、多少無理があるように思う。東南アジアで行われた開発政策、工業化政策が具体的にはどのようなものか、また自律した国家アクターによって提示され実現されて、どういう経済成長に結びついたのかということが提示されなければ、大ざっぱすぎる感じがする。

むしろ東南アジアというのは、開発独裁のときにはだいたい開発に失敗してきた。1980

年代の末、プラザ合意後の日本を中心とした大規模な民間投資を契機として捉えた方が自然だろうし、その意味では国家が何かをしたというのではなく、市場の妨げにならない程度の悪さしかなかったという、そういう逆説が成り立たないわけでもない。開発だけで東南アジアの経済を論じるのは無理があるように思う。

高谷さんの議論は東南アジア研究者にとっては元気が出てくる。東南アジアは非常にバランス感覚があり、開かれた世界であって、上からの号令で動く国家ではない。昔から非常に賢い人々がいて、国境を超えて自由に行き来するネットワークがあった。これは21世紀を展望する上で、むしろモデルになるだろうという議論に私も賛同したいが、しかし、90年代に入って目につくのは、東南アジアがごく普通の国家になりつつあることだ。軍隊を持ち、自国の兵器産業まで持って、国民車みたいなものを持っている。国境もかなり意味を持ってきて、初めて領域国家になってきているように見える。つまり国家として自己主張をし、しかもその国家は単にオフィシャル・ナショナリズムではなく、何か実態を持ってきているように見える。東南アジアの国々は、このまま当たり前の国になってしまうのか、それとも後で必ずバランスをとってくるのか。高谷さんには、このあたりの現象がどう考えられるのかをお聞きしたい。

岩崎 開発体制の副産物として、新中間層が

出現したと理解した場合、これが新東南アジア形成を促す一つの要因になるのか。確かに成長の結果、ASEAN諸国の首都だけでなく、消費文化、消費ブームが東アジア全体で起こっているのは確かだと思う。これが新東南アジア形成の中でどういう役割を果たすのかという点については私の範囲を超えており、どなたかの指摘に譲りたいと思う。

政治指導者が新中間層をどう考えているのかの問題は、それを政治的な意味合いとして政治指導者がどう捉えているのかということだと思う。この点では二つの違った性格を持っていると思う。新中間層を大衆消費者という点から見れば、政治的には大きな問題にならない。しかしこれを専門家やインテリ層と読み換えてみれば、新中間層はまさに成長の最大の受益者である。その意味では、この体制の中でこそ、自分はメリットを得たのだという意味で、政治的には保守的な性格を持っていると思う。

だが、同時に彼らは海外留学の経験者が多い。ASEANの開発体制とは違った政治文化を経験し、現在の情報の同時性の中で、自分の国の政治システムとは違った政治システムを知るようになる。この点からすると、政治的な対応の点では接点にいてのではないかと。政治指導者は新中間層をいかに体制の中に取り込んでおくかということに腐心するだろう。それは開発体制が後どれぐらいもつかにかかってくるのではないかと。

片山さんから、官僚テクノクラートがASEANの開発体制に役割を果たしたが、それはきちんと実例を挙げて説明しなければ、説明として無理があるという指摘が出された。ASEAN諸国の官僚制は、開発体制の中で二重構造を持っていると思う。一つはいわゆる「伝統的な官僚制」の部分で、これは開発や近代化とは関係なく、例えばフィリピンの場合パトロネージの手段としての官僚制、インドネシアはスハルト体制のマス基盤を広げるために官僚が膨張したが、そういう経済開発とは関係のない政治的な意味合いでの官僚制を「伝統的な官僚制」と呼んでみる。もう一つが「テクノクラート官僚制」で、開発体制の下ではいずれの国においても、例えばインドネシアでバークレー・マフィアという言葉に象徴されるように、人数的にはかなり小数であるが、欧米の大学で開発経済学や行政学を学んだエリート官僚の一群が形成されたのは確かであり、軍や政党が権力を握る開発体制の下で、開発政策、行政の任務を与えられたのだと思う。

そういう構造の話だけでなく、その政策がASEAN諸国の成長と結びついたという立証をしなければならないが、その点に付いては私はシンガポールの事例でしか言えない。スタートの仕組みで言えば、ASEAN諸国のいずれの国でも、伝統的な官僚制の部分と、ほんの一握りのテクノクラート官僚制ができた。そして後者のエリート官僚が各国の産業

政策、開発行政に関わり、その点ではシンガポールでしか実証できないが、そういうことがあったのではないかということを言いたかった。

山下 今回のシンポジウムは、国際関係論あるいは政治・経済から見た東南アジア世界の形成ということと、東南アジアだけからは東南アジアはわからない、視点を一步も二歩も退けてみようという二つのことがあったと思う。後者に関して言えば、松岡さんのコメントの中に、ワシントンが投げた球をサイゴンが受けとめ、インドネシアが内野で、オーストラリアが外野であるというグローバルなスケールの話があった。これは国際政治に関することであるが、文化という視点からみるとどうなるのか。

私に関心を持っている1930年代のバリのケースをみても、ニューヨークの画家や人類学者、あるいはヨーロッパの芸術家や考古学者のまなざしの中から、バリの民族文化が立ち上げられていくということがある。すると、今度はバリの側はそうようにして立ち上げられた民族文化を観光開発の中で使っていく。自律か他律かということ言えば、他律的に規定されたものを自律的に捉え直していくということになるだろう。

この例は一つの例にすぎないわけだが、東南アジアを全体的にとらえた時に、東南アジアの「地域文化」を設定できるのかどうか。例えば政治的には、ASEANというシステ

ムができあがっているかもしれないし、経済の流通のシステムで東南アジア的なものが出てくるかもしれない。だが、文化という点では、東南アジアは多様だということになっている。岩崎さんは冷戦後の東南アジアの開発体制の中で文化が重要になると言われたが、その場合の文化とはいったい何なのか。また倉沢さんが、今日の都市を中心とした消費文化の展開を指摘されたが、これは東南アジアという地域だけ規定できるものではないと思う。それは香港にも、台湾にも、東京にもつながるグローバルな側面を持っている。このシンポジウムのテーマは、東南アジア世界の形成となっているが、東南アジア世界とは政治的な秩序や、経済的な秩序の形成だけではないだろう。東南アジアの文化の形成を考えたならば、どうなるのか。高谷さんの言われた「環境文化」を含めて、ご解答いただければと思う。

もう一つ、斎藤さんに質問したい。今、私は政治、経済、文化の次元に言及したが、斎藤さんの議論の中には、社会という次元があるように思った。結論のところで出てきた安川さんの「学校教育の誕生」を引用して、「学校教育がどのように誕生していくかという契機として、人々の相互依存の網の目の拡大と、それに応じて家庭と学校の関連変化に伴う、社会的結合の在り様の変化にあった」と述べられたが、近代の中で東南アジアが立ち上がっていく時に、社会関係のありようが

どういふものなのかをお聞きしたい。

田村愛理 私はアラブのナショナリズムを研究しているが、斎藤さんの結論部分、東南アジアがあってそこに「近代化」が来たのではなく、むしろ「近代化」の中で東南アジアが形成されたというのは、東南アジアをアラブに換えても全く同じことが言える。アラブがあって近代化が来たのではなく、近代化の過程の中でアラブという意識が生まれてきたことは確かに言えると思う。斎藤さんは高谷さんのコメントに対して、あっさりと兜を脱いでしまい、近代国家をとりさればそこに東南アジアの実態が見えてくると言われたが、それは当たり前のことではないか。アラブにはもちろんアラビア語があり、共通の歴史認識があり、父系制理念を中心とする生活共同体があった。こうした実態がある時にテリトリーを持った政治の動きとして意識化されるのは、やはり近代国家の影響なくしては考えられないと思う。あっさりと兜を脱いでしまったのは、他の地域を研究する者にとっては不満が残った。

それから高谷さんに、文化に関して質問したい。先程の比喻では、政治というのは一種の衣であって、どんどん脱いでいけば、そこに嫁さんの裸の実態があるとおっしゃったが、果たしてそこに実態はあるのか。それは本当の文化の実態とは言えないのではないかと思う。文化はさらに何重にもまとわれ、時に応じて装いを変えて、新たに出てくるものでは

ないだろうか。

斎藤 私のコンテキストの中では「文化」というのは非常に極めて慎重に使わざるを得ない。つまり、文化を語るとというのが極めて近代的な現象であるというのは、たぶん間違いではないだろう。それゆえ文化とともに近代化がどうなるのか、近代化によって文化がどうなるのかということ自体、トートロジカルな気がする。近代的には、近代化の一現象として文化を語るというふうにしかな考えられないのではないか。

「社会」を考えているのではないかと言われれば、たぶんそうだと思う。ただ「東南アジア社会」という、東南アジアの社会があるようには今のところ考えていない。とりあえずここでは「何がしかそこにある元々あったもの」という程度ではあるが、人間的なとり結びはあったに違いないと思っている。それをたぶん指摘されて気づいたが、極めてナイーブな形で、それを「社会」と認識していたのだろう。それがどういうものなのかは、これから考えていきたいと思う。

それから、田村さんの言われたことはよくわかる。田村さんと高谷さんの板挟みになった状況で困っているが、おそらくビッグバンが起こる、宇宙が広がるその前の段階を我々素人が頭の中で非常に考えづらいのと同じなのだろう。我々が語る言葉は近代化という現象の中で生産されてきた言葉である。ビッグバンが起こるちょっと前にも、おそらく何か

があった。その変化が何かを頭で考えるのは非常に難しく、我々が語れる物質があるわけではない。それと同じように、人間がそこで暮らしを営んできた限り、何かあったはずだ。それを極めてナイーブに社会と考えていたのだが、それは少し考え直さなければいけないのかもしれない。

山影 昨日の立本さんの枠組み、それから今日も高谷さんの質問で、私の「安全・経済・共同体」の三本柱事をめぐって議論や質問を頂いた。それに関しては間接的な答え方になると思う。バリの文化にある種の伝統の意味が与えられていくという山下さんの指摘があった。10年ほど前、「バリの文化をもってフランス文化を代表させるのはけしからん。フランスの多様性はそんなものでは語れない」という文章を読んで「バリの文化をもって東南アジアの文化を代表するのはけしからん。東南アジアの多様性はそんなものでは語れない」というパロディを作ったことがある。多様性やまとまりというのは認識レベルの問題で、実態を語ったら多種多様、森羅万象にいつてしまう。それを我々がどのように切るのか。言葉を使うときに切断が起こり、ある種の概念形成が起こる。その切断の仕方を実感することが、文化や地域を語るときに必要ではないだろうか。

高谷さんは国際関係論や英語かぶれを叱咤されたが、ある意味では非常に同感している。私は最近、国際関係論の中で東南アジアを

テーマにしているが、決して東南アジアに住みこんで現地を研究しているわけではない。私のような仕事では、東南アジアには国際会議で行く場合がほとんどで、空港とホテルの往復しかない。自分が触れたい東南アジア、探したい東南アジアには全く触れていない。いわゆる東南アジアにちゃんと行くチャンスがなくなっている。逆に言えば、東南アジアの中にもそういう空間ができつつあるということだ。ここにいる我々も、洋服を着てネクタイをしめている。これはヨーロッパ帝国主義によって強制されたわけではない。こういうものが浸透するのは戦後になってからのことだが、それをもってアメリカ文化に毒されているとは言えないだろう。洋服を着ているから他律的に行動しているとも言えない。裸になれば日本人か。いや、洋服を着ているのも日本人だし、非常に礼儀正しいのも日本人だし、東南アジアに行ってバカなことをやるのも日本人だ。

人間は色々な共同体に同時に属している。必要最低限でも家族があって、時間の中で生きていくためのエスニックな共同体に属し、毎日生きるための地域共同体に属する。それがユニフォームになっているはずはない。個人は地域共同体の中では他のエスニックグループに属す人と一緒に生活をし、エスニック共同体の中では、非常に離れた人と共通の文化を作っている。共同体、あるいは文化を論じるときに、その括り方によって色々な捉

え方があるのだということを前提にしている。

今日の議論の中では、東南アジアが消えつつあるのではないか。アジア経済圏や植民地主義のときには東南アジアという話をしているが、今日の議論の単位は国民国家になってきている。国民国家が非常に強くなると、東南アジアにまとまりがなくなるのか。いやそうではないと、そこでASEANが出てくる。本当にそんなに単純なものでいいのだろうか。やはり共同体の重層性というのがあって、新しい国民共同体も出てくる。

地域共同体に様々な外界からの影響があったときに、意識されないとそれはあくまでも所与の問題、あるいは他律的に反応しなくてはいけませんが、自覚する、あるいはそれを「我々は」というふうに自覚する、あるいは外のものも含めて「我々を作る」ということによって、所与のものから操作可能なものへと移行する。そういう変化があるのだろう。いま東南アジアで起こっているのは、新しい共同体が付け加わり、古いもの置き替わるというものではない。それまであった共同体の中身にも変質が起こっているのではないか。

我々は地域研究という形で、東南アジア以外の人々が見て、東南アジアがあるのか、ないのか、まとまっているのか、いくつに切れるのか、という議論をしている。私がASEANに注目しているのは、東南アジアの人が「東南アジア」だと、国よりも大きな単位で、あるいは、いままでになかったような単位で、

そのまとまりを言い出したことにある。ASEANならASEAN、東南アジアなら東南アジアを語るときに、それが何なのかということについての共通の理解が、彼らの間に共有され始めたのだ。そこに注目してみたいと思う。それ自体が東南アジアの形成なのかどうかは別としても、彼らがそういう言葉遣いをするようになったことを、我々はどう認識するのかということに関心がある。

高谷 今朝、テレビを見ていたら、一人で1兆5千億の金を借りて、毎年1千億儲けている人の話が出ていた。日本が経済成長を遂げようとするなら、これからは自動車やコンピュータではない。キャッシュを集めて投資するのだ。それこそが素晴らしいというような話だった。これは実に困った話だ。私が地域研究で一番気にしているのは、金やメディアのように人間と環境との間に入って膨張し、一人歩きを始めるものがあるということである。それが度を越せば地球が潰れかねない。それを大変気にしている。山影さんが言われたように、色々なアイデンティティが重層している。それは認めるが、それはあまり言わないでほしい。なぜなら、そうしたアイデンティティは多くはそうしたメディアを介して作られているものだからだ。いまは環境に定着したアイデンティティを主張しなければ、地球が潰れるようなこともありうるのだ。

田村さんの指摘はその通りだと思う。嫁さん自体も変わっていく。本体自体も常に変わ

るものなのだろう。昨日、立本さんは、華僑ネットワークを外からのネットワークと見るか、自分のものと見るかという点でこだわられた。この問題も自律と他律という問題に関わっていると思う思う。本体も不変ではなく変わるというふうに考えておきたい。

片山さんは、東南アジアはごく普通の国家になるのではないかと言われた。おそらく放っておいたらそうなるだろう。強引かもしれないが、そうならないように頑張って主張するのが地域研究だと思っている。その点に関しては山下さんのコメントを思い出しておきたい。バリ文化の話を例に、外からのインパクトによって自律が育ってくると言われていた。その通りだと思う。私達は外からでも東南アジアを元気づける必要があるのだと思う。ただ、外からのインパクトがあれば、何でも出てくるのだとは言えないだろう。その土地に種子がなければならぬ。タンポポの花が咲くところには、やはりタンポポの種があると思う。その土地に何があるかを見極めておくことは大変必要である。地球上は決して一色ではない。タンポポの花しか咲かないところがあれば、ハコベしか咲かないところがある。そういう地域差を見極めたい。

中華世界という大きな世界がある。インドという世界がある。ASEAN的な海民のいるところがある。またベトナムというのがいて、これはちょっと強くなったら飛び出してくる。ジャワも強い。これも独自の生き方を

堅持している。アジアにもいろいろの地域があるのである。

東南アジアに独自の文化を求めるとするならば、私はそれは生態論理という文化であると思う。東南アジアが21世紀に入るにあたって世界に向けて発信できる文化があるとしたら、生態に即して生きるという哲学、生態論理だと私は考えている。それを考えるとき、東南アジアは決してマージナルではない。

山影 長時間にわたるシンポジウムではあったが、時間が足りない、あるいは時間の割には討議すべきテーマが多かったという印象がある。主旨説明の中にも書いたように、これが東南アジアだというような、正しい東南アジア像を見つめるというよりは、見方によって多様な東南アジアが描くことができるはずだ。その際に、空間とシステムそれぞれにおいて、「東南アジア」という言葉にも様々な使い方があ

ものはお互いに整合的であり、あるものは対立的であるような様々なイメージが出てきた。我々が語っている世界それ自体、まだ明確な共通認識さえできていないのだということを、やはり肝に命じておかねばならない。

シンポジウムの議論の内容については、不満や反論を含めて様々な思いを持たれたことだろう。それは是非、様々な機会に目に見える形で表して頂きたいと思う。それが重点領域研究というプロジェクトの責務であろう。東南アジアをこれからどのように理解していくのかという、地域の捉え方の問題も、やはり重点領域の研究だけで閉じてはいけない。開かれた学問共同体の中で、総合的な地域研究、あるいはその手法の確立の中で、広く深く議論されるべきだろう。このシンポジウムが開かれた議論を続けていくための一つの踏み石になればと願っている。